



このコーナーは新刊の心理学関連書籍を著者自らにご紹介いただくコーナーです。

月の錯視 なぜ大きく見えるのか

東山篤規

月の錯視とは、地平線に近い月が、空高く上った月よりも大きく見える現象である。月の錯視がなぜ生じるのかという問いかけに、2400年にわたる文献を博搜して答えたものが本書であり、著者たちは、錯視の要因を特定するとともにその寄与率を示し、これらの要因が関わる知覚過程を描くことに努力を傾注している。

著者たちは、錯視の要因として、地面の状態（40%）、目と体の位置（10%）、霧の状態と月の色（10%）をあげる（数値は寄与率）。錯視の説明として、月を含

む遠景の視角が拡大されると仮定する大きさの恒常性の機構を提案する。大気による屈折や眼の生理光学（収差・近視）では錯視は説明されず、古典的な大きさと距離の不変性のような幾何学的処理過程も説得的でない結論する。

本書の魅力は、その結論にあるのではなく、現存するデータを読み解く過程にある。月の錯視の研究は錯綜の歴史であったが、読者は、このゆえんに気づかされ、正しい認識に至るためには、何が将来の研究にとって必要なかを会得されるだろう。



訳 東山篤規
発行 勁草書房
A5判 / 376頁
定価 本体3,700円＋税
発行年月 2014年8月

ひがしやま あつき
立命館大学文学部教授。専門は知覚心理学、環境心理学、精神物理学。著書はほかに『体と手がつくる知覚世界』（勁草書房）、『両眼視空間と輻輳の機能』（東大出版会）、『視覚ワールドの知覚』（共訳、新曜社）、『痛みの話』（共著、日本文化科学社）、『触覚と痛み』（共著、おうふう）、『新編感覚・知覚心理学ハンドブック』（分担執筆、誠信書房）など。

女性研究者と ワークライフバランス

キャリアを積むこと、家族を持つこと

久保（川合）南海子

就職や仕事を優先させるか、結婚・出産・育児などの生活を優先させるか。女性ならば誰しもが、そんな選択のはざまに立たされることがあるかもしれません。

どちらもあきらめることなく、どうやって乗り越えていきましょうか？ 就職と妊娠、遠距離結婚生活、主夫の支援、男性の育児休暇、慢性疾患の病児保育、子連れの外研究など、本書の例は一見すると特殊なケースのようですが、これはすごく頑張っている人の特別な話ではありません。研究者には珍しくない例や、誰にでも

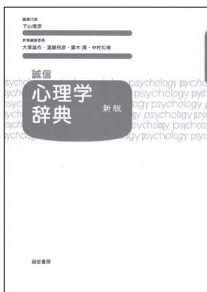
起こりうることです。さまざまな局面での現実的な解決策、活用した制度やその使用感、家族や周囲の人との協力体制だけでなく、つらい時期のきれいごとではない悩みも包み隠さず書いています。配偶者によるコラムもあり、夫の視点からも語られています。

それぞれの話について、共感できるところや反論したい部分があるでしょう。それが「あなたの」ワークライフバランスです。いま悩んでいるあなた、これから先が気になっているあなた、手に取って一緒に考えてみませんか？



編著 仲真紀子・久保（川合）南海子
発行 新曜社
A5判 / 144頁
定価 本体1,600円＋税
発行年月 2014年9月

くぼ-かわい なみこ
愛知淑徳大学心理学部心理学准教授。専門は実験心理学、老年心理学。著書はほかに『老年認知心理学への招待』（共著、風間書房）、『エイジング心理学ハンドブック』（共訳、北大路書房）など。



編著 下山晴彦・大塚雄作・遠藤利彦・齋木潤・中村知靖
発行 誠信書房
B6判 / 1104頁
定価 本体5,800円+税
発行年月 2014年9月

おつか ゆうさく
独立行政法人大学入試センター試験・研究統括官、京都大学名誉教授。専門は教育心理・教育評価。著書はほかに『生成する大学教育学』（共著、ナカニシヤ出版）、『大学教育のネットワークを創る』（分担執筆、東信堂）、『心理学者、大学教育への挑戦』（分担執筆、ナカニシヤ出版）など。

誠信 心理学辞典 [新版]

大塚雄作

わからない言葉が出て来たとき、最近はWebでの検索が常道であろう。しかし、Webの情報に全幅の信頼が置けるわけではない。より深く学ぶというときには、書籍の威力は棄て難いものがある。なかでも辞典は、その学びには欠かせないものである。

科学の急速な発展の時代にあつて、本来、辞典は常に更新されるべきものである。しかし、その改訂はそう生やさしいものではない。一時に多くのエネルギーを集させる大きな努力が必要となる。本辞典も、4年間をかけて何

とか完成までこぎつけることができた。まさに、多くの執筆者の献身的な協力と、誠信書房編集部辛抱強い支援の賜物である。

本辞典は、有用な学習材とすべく、五十音配列ではなく27の領域ごとにまとめる形をとった。心理学を志す若き学徒の学びをはじめ、さまざまな資格検定等の準備にも有用となろう。さらに、心理学に関心をもつ初学者も想定してわかりやすさを心がけてもいる。とにかく一冊手元に置いて、広大な心理学の世界の魅力に多くの方に接していただければと思う。



監修 往住彰文
編著 村井源
発行 新曜社
A5判 / 240頁
定価 本体2,600円+税
発行年月 2014年7月

かわかみ ふみと
日本学術振興会特別研究員（京都大学霊長類研究所）。専門は発達心理学、比較認知科学。著書はほかに『ヒトはなぜほえむのか：進化と発達にさぐる微笑の起源』（共著、新曜社）など。

量から質に迫る

人間の複雑な感性をいかに「計る」か

川上文人

人間の複雑な感情や感性を理解することは可能なのだろうか。本書は心理学の原点ともいえるその疑問に挑んでいる。対象は虚構理解（良峯徳和）、文学（工藤彰）、宗教（村井源）、音楽（河瀬彰宏）、感情機構シミュレーション（野田浩平）、笑顔（川上文人）、人工物への愛着（松本斉子）と多岐にわたり、その分析ツールの開発（川島隆徳）も説明されている。

これまで本書の研究対象は批評という形で、質的に迫られることが多かった。感情についても、保育や臨床における質的な事例の分析

が多い。個々の作品や事例を深く理解する術は、専門家のひらめきによる場合もある。しかしそこに客観性の保証はない。本書では、各対象を数値に落とし込むことによる客観的な理解を目指している。どちらが正しいという議論は不毛である。しかし、これらの対象に量的に迫ることが革新的といえる。

本書は往住彰文先生の最後の作品となってしまった。しかし、その指導を受けてきた執筆者たちもその作品といえよう。未熟な作品たちの成長を促すべく、ぜひご批判いただきたい。